



プログラム・ノート

中村ひろ子

カヴァイエ=コルのオルガン

オルガンという楽器には、21世紀の今も世界標準は存在しない。見た目も音色も仕様も時代と国によって大きく異なり、現代の楽器もそのいずれかをベースに設計されている。そして、それぞれの時代を画したオルガン建造家が存在する。17～18世紀であれば、北ドイツのアルプ・シュニットガー、南ドイツのゴットフリート・ジルバーマン、フランスのフランソワ＝アンリ・クリコラが名高い。そして、19世紀ロマン派の時代のフランスを代表するのが、並ぶ者のない名匠カヴァイエ=コルだ。

アリストイド・カヴァイエ=コルは、1811年南仏のモンペリエに生まれた。祖父も父もオルガン職人で、アリストイドも早くから父のもとで修業した。1832年、製作した楽器がたまたまロッシーニの目に留まり、その勧めでパリに出て優れたオルガン建造家として頭角を現す。そして、パリのサント=クロティルド教会、サン=シュルピス教会、マドレーヌ寺院、パリ万博の際に建てられたトロカデロ宮殿をはじめ、ヨーロッパ各国、ロシア、北米・南米から北京と、1899年に亡くなるまでに500台以上の楽器を建造した。現存する楽器も多い。

カヴァイエ=コルのオルガンは近代オーケストラの響きを理想とするもので、色彩感の豊かな音色をもち、自在に強弱がつけられる。その文字どおりシンフォニックな響きに触発されて生み出されたのが、フランス・ロマン派独特のオルガン交響曲というジャンルである。今日のプログラムには、2曲のオルガン交響曲の他、ラヴェル以外はすべて何かしらカヴァイエ=コルのオルガンにつながる作品が選ばれている。

ヴィドール：オルガン交響曲第5番 へ短調 作品42-1 より 第1楽章

シャルル=マリー・ヴィドール（1844～1937）は、生涯にわたってサン=シュルピス教会のオルガニストを務めると共に、パリ国立高等音楽院教授としてヴィエルヌ、デュプレらを育てた。アルベルト・シェヴァイツァー（1875～1965）の師でもある。作曲家としてはオペラ、バレエ音楽、交響曲、室内楽など様々な作品を残したが、今日ではもっぱら10曲のオルガン交響曲で知られる。いずれも4～7つの楽章をもつ大規模な作品。第5番は、1879年にトロカデロ宮殿のオルガンで作曲者自身によって初演された。オルガン交響曲の中でも演

奏機会が多く、第5楽章「トッカータ／アレグロ」は独立して演奏されることも多い。今日はコンサートの幕開けにふさわしく第1楽章「アレグロ・ヴィヴァーチェ～ピウ・レント」が演奏される。

フランク：『3つの小品』より 第2曲「カンタービレ」

セザール・フランク（1822～90）はベルギーに生まれ、パリ音楽院に学び、サント・クロティルド教会のオルガニストを終生務めた。1872年からパリ音楽院教授を務め、フランキストと呼ばれる多くの作曲家を輩出した。今日に至るパリ音楽院を中心としたオルガン楽派の源流ともいべき存在である。ヴァイオリン・ソナタイ長調や交響曲ニ短調で知られるが、オルガン作品では、サント・クロティルド教会のオルガンのために書いた『6つの小品』、『3つの小品』、『3つのコラール』がよく演奏される。特に『6つの小品』の第2曲「交響的大曲」は、オルガン交響曲の嚆矢となった作品である。『3つの小品』は、1878年パリ万博で作曲者自身によって初演された。

ヴィエルヌ：オルガン交響曲第6番 口短調 作品59 より 第5楽章

ルイ・ヴィエルヌ（1870～1937）は生まれつき盲目で盲学校に通っていたが、10歳のときサント＝クロティルド教会でフランクのオルガンを聴いて衝撃を受け、オルガニストの道を歩んだ。パリ音楽院でヴィドールに師事、卒業後はノートルダム大聖堂のオルガニストを終生務めた（この楽器もカヴァイエ＝コルが改修している）。1927年にはアメリカ演奏旅行で人気を博したりもしたが、1937年、大聖堂での即興演奏の最中に劇的な死を遂げた。師のヴィドールを受け継いでノートルダム大聖堂のオルガンのためにオルガン交響曲を6曲書いている。1930年に書かれた第6番はその集大成ともいべき作品で、「序奏とアレグロ」、「アリア」、「スケルツォ」、「アダージョ」、「終曲」の5楽章からなる。

サン＝サーンス（ルメア 編曲）：『死の舞踏』作品40

カミーユ・サン＝サーンス（1835～1921）のキャリアの出発点はオルガニストだった。パリ音楽院を卒業後、サン＝メリ教会を経てマドレース寺院のオルガニストを20年ほど務めている。オルガンやハルモニウムのための作品も15曲ほど残しているが、オルガンがらみで今日もっとも有名なのは交響曲第3番「オルガン付き」であろう。交響詩『死の舞踏』はサン＝サーンスが残した4つの交響詩の中ではよく知られた作品で、1875年に初演された。オルガンのために編曲したエドゥイン・ルメア（1865～1934）は英国人で、後半生をアメリカに暮らしたオルガニスト／作曲家。オーケストラ曲のトランскクリプションは、今日でもよく演奏されている。

ラヴェル（デュボワ 編曲）：『クープランの墓』より

「リゴードン」「メヌエット」「トッカータ」

モーリス・ラヴェル（1875～1937）が1914年から1917年にかけて作曲したピアノによる組曲。作曲者自身の編曲による管弦楽版（全6曲から4曲を編曲）もある。フランソワ・クープラン（1668～1733）の名を冠しているとおり、バロック時代の組曲の形式を借りて書かれている。墓（Tombeau／トンボー）は、17世紀フランスでしばしば書かれた死者の思い出に捧げる曲。ラヴェル作品は、各曲それぞれが第一次世界大戦で命を落とした友人たちに捧げられている。第4曲「リゴードン」は南フランスに由来する舞曲で、17～18世紀の宫廷舞踏で人気だった。第5曲「メヌエット」は典雅な3拍子の舞曲。第6曲「トッカータ」は速いテンポの連打が印象的。デュボワによる編曲は、バロック風というより管弦楽版を思わせる。

デュプレ：『エヴォカシオン』作品37 より 第3楽章

マルセル・デュプレ（1886～1971）は、20世紀屈指のオルガニスト。ヴィエルヌ、ヴィドールに学び、パリ音楽院の教授として多くのオルガニストを育てた。欧米各地で2000回以上の演奏会を行い、1920年には10回にわたるバッハのオルガン全曲演奏会をすべて暗譜で成し遂げたことで名高い。また、ヴィドールの後を継いでサン＝シュルピス教会のオルガニストを務めている。オルガン作品はほとんどがカヴァイエ＝コルのオルガンのために書かれた。『エヴォカシオン』は交響的詩曲とも呼ばれる組曲で、第1楽章「モデラート」、第2楽章「アダージョ・コン・テネレツツア（ゆるやかに、やさしく）」、第3楽章「アレグロ・デチーズ（速く、決然と）」からなる。本日はその中から第3楽章が演奏される。

ヴァンサン・デュボワ：即興演奏「サルヴェ・レジーナ」

オルガニストは、誰でも即興演奏の心得がある。教会オルガニストとして奏楽をする際には、礼拝の進行に合わせて臨機応変に音楽を伸縮させたり間奏を弾いたりする必要があるからだ。特にフランスには即興演奏の長い伝統があり、コンサートに即興演奏を1曲交えることも珍しくない。シンプルなテーマから楽器の特性を最大限に生かした即興演奏が自在に展開していくのは、実にスリリングだ。その場で渡された「お題」を基に即興することもあるが、本日は「サルヴェ・レジーナ」による。聖母マリアに捧げるグレゴリオ聖歌で、ヴァンサン・デュボワがオルガニストを務めるノートルダム大聖堂では毎日のように歌われているという。

（なかむら ひろこ・プロデューサー／翻訳者）